

## 刺し子 – 変化する伝統 –

*Sashiko*: Changing Tradition

杉野 公子

SUGINO, Kimiko

### 1. はじめに

「刺し子」というと、藍染された紺色の木綿布を何枚か重ね合わせ、白糸を刺した東北地方の野良着というイメージがあり、いにしへの服飾文化のように感じられる。しかし、「刺し子」は現代にも生き続ける服飾手芸の一つだ。今年だけで「刺し子」の縫製方法に関する書籍は4冊も出版されており、そのうち3冊は若年層を意識したものである。

大型服飾材料専門店であるオカダヤ新宿本店（株式会社オカダヤ 以下、オカダヤ）における「刺し子」の売場の変遷についてうかがったところ、40年ほど前から「刺し子専用」の糸はあったが、白・黒・紺等の限られた色だけであっただけであったらしい。色が豊富になったのは10年ほど前からだが、刺繍部の一部としての販売規模であったという。しかし、現在では「刺し子」コーナーを売場に設けるようになり、「刺し子専用」の糸・針・キット・書籍・サンプル作品等が所狭しと並んでいる（図1）。売場はとても懐かしいような楽しい印象を受ける。これは近年における服飾手芸界での雑貨小物・ワンポイント刺繍のブーム、さらに「刺し子」の材料の多様化、デザイン豊富なキットの販売により消費者ニーズが高まり、これに応えたものである。

「刺し子」の書籍についても手軽で簡単にできる花ふきんや小物等が紹介されることが多くなり、「刺し子」の材料の購買層にも若年化がみられたという。その結果、従来の和調柄を好む年配層から近年獲得した若年層を含む幅広い年代に「刺し子」は支持されることになり、オカダヤでは、ここ数年の「刺し子」関連の売上は伸びる結果になっている。

最近の小学校・中学校・高等学校の家庭科の授業で被服が取り上げられることが少なくなる中、なぜ若い

人々が「刺し子」に興味・関心を示すのか。本稿では、「刺し子」の生まれた歴史的背景や機能、「刺し子」を刺した人々、出版された書籍等を基に「刺し子」文化の移り変わりを調べ、それらを踏まえた上で「刺し子」を用いた3点の洋服を提案したい。

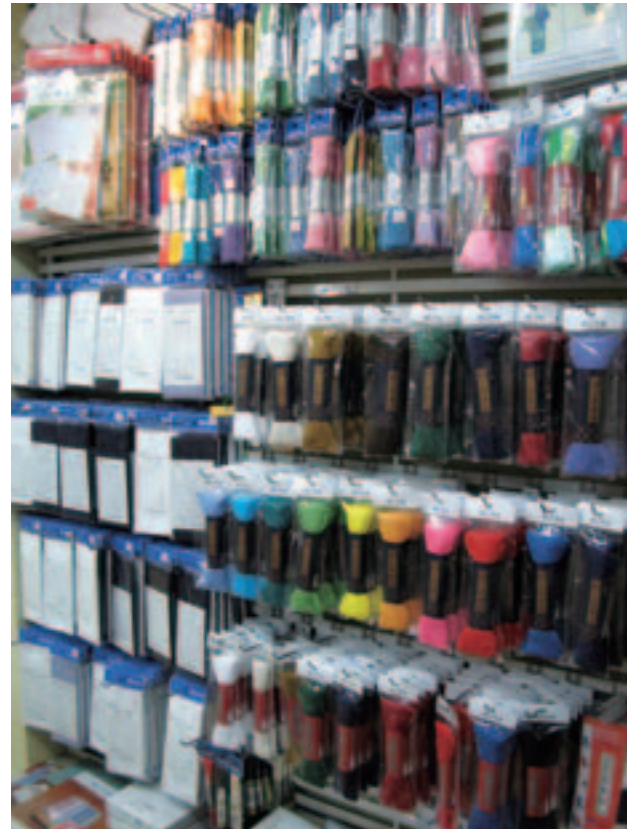


図1 オカダヤ新宿本店の「刺し子」コーナー  
（「刺し子専用」の糸・針・キット・書籍等）

## 2. 刺し子が生まれた歴史的背景

今日の私達の衣生活を見回した時、木綿製品を目にしないことはない。下着やTシャツ、ジーンズ等、あまりにも身近すぎて「綿」が日本原産の繊維でないことを知らない人も多いだろう。「綿」が日本に入って来るまでの間、私達の祖先が着ていた衣服の材料は樹皮や草皮であった(図2)。山麻(野生化した大麻)、藤皮等で作られたもじり袖の衣服の形状は飛鳥時代以前から伝承されてきたものである(図3)<sup>1)</sup>。

「綿」が日本で普及し始めたのは江戸時代中期頃である<sup>2)</sup>。しかし、東北地方は「綿」の栽培には適さない寒冷地であった。たとえば、山形県の「刺し子」の技術の発展について見ると、紅花の紅もちを上方に運ぶ北前舟は上方からの帰りに木綿製の古着を運んだ。

「綿」は樹皮や草皮と異なり、保温性があり、やわらかかった。その貴重な木綿(古着)を人々は最後の最後まで大切に使った。古着は「裂織(さきおり)」と「刺し子(さしこ)」という人々の知恵から生まれた技法によって新たな布として生まれ変わった。

「裂織」とは古着の縫い目をほどこき、一枚の布に戻し、布を裂いていく。裂いた布を糸と同じようにもう一度織っていく技法である。図4の左側の裂織交織浜着(さきおりまじりおりはまぎ)は経糸に藤糸、緯糸に古着(木綿)を裂いたものと藤芯の紙縫(こより)糸を交互に入れて織ってある(図5)。図4の右側の裂織衣は経糸に藤糸、緯糸に古着(木綿)を裂いたものと藤糸を交互に織り込み、強度を与えている<sup>3)</sup>。

東北地方の「刺し子」は、基本的に補強と保温のために行なわれたものである。「刺し子」をすることで、①糸を刺すことで丈夫になる(安田・永津1983<sup>4)</sup>)②布と布が重なることでその間に空気の間ができるために暖かさが増す③小さな布も使うことができるので捨てる布がない、等利点が多い。図6は全面刺し子が施されている。表から見れば一枚の布に見える衣服も裏を返せば、小さな布も使われていることが分かる(図7)。「刺し子」の模様には、柿の花刺し(図8)、そろばん玉(図8)、杉綾(図9)、亀甲といった日常生活の中から生まれている。これら「刺し子」の針目は、本来の機能からすればこれほど細かく刺す必要はない。しかし、このように細かく刺すのは、おしゃれ心と見栄からではないか、と原始布・古代織参考館の山村幸夫氏は語られる。「刺し子」は大変な手間がかかるため、大切に着られ続けた。しかし、このような「刺し子」を着ることのできる農民は暮らしむきにゆとりのある農民であって、下層農民は「刺し子」をする時間もなく布を下げたままの状態を着ていたという<sup>5)</sup>。



図2 樹皮・草皮繊維 原始布・古代織参考館所蔵



図3 山麻(左)・藤皮(右)もじり袖の衣服 原始布・古代織参考館所蔵



図4 裂織布 原始布・古代織参考館所蔵

図5 裂織布部分 原始布・古代織参考館所蔵





図6 刺し子  
原始布・古代織参考館所蔵



図7 図6の刺し子の裏側  
原始布・古代織参考館所蔵



図8 刺し子（柿の花刺し・そろばん玉）  
原始布・古代織参考館所蔵



図9 刺し子（杉綾）  
原始布・古代織参考館所蔵

### 3. 「刺し子」をする人々

「刺し子」とは、小学館『日本国語大辞典』によると、『名』厚手の綿布を重ね合わせて、一面に細かく刺し縫いをしたもの。消防服や柔道、剣道着等に用いる。さしっこ。方言①綿布を一面にこまかく刺し縫った仕事着。②足袋の表面を一面に刺し縫ったもの。」とある<sup>6)</sup>。「刺し子」を『古事類苑<sup>7)</sup>』で調べると「刺し子」という単語がないことから、「刺し子」とは新しい言葉である可能性も指摘できる。「刺し子」の「刺し」とは、古着等の補修、または補修するための刺し縫いの技法（ぼろ刺し）をさす言葉で、刺されたものを「刺しもの」、東北地方の言葉で「刺し子」というらしい<sup>8)</sup>。直線的なぼろ刺しが行われたのは、上方から運び込まれた古着をずれないようにするためであったことを考えると「刺し子」は江戸時代中期以降に使われ始めた言葉と言えるかもしれない。

「刺し子」というと、東北地方の農民の服飾文化と思われがちだが、「刺し子」は農民だけの服飾文化ではなく、地域も東北に限定されていない。

「刺し子」といってまず始めに思い浮かぶのは、何枚もの布を重ね合わせた藍染された布地に白糸で刺した東北地方の農民の「刺し子」の野良着であろう（図6～9）。その理由のひとつとして「刺し子」を紹介する書籍が挙げられる。「刺し子」の縫製に関する書籍を出版している人の中には、東北地方の「刺し子」を参考に説明する人が多い傾向が認められる（詳細は後述）。

書籍等で紹介される東北地方の農民の「刺し子」に華やいだ朱色等がないのは、江戸時代に幕府や各藩による衣服統制があったことが大きな要因であったらしい。当時の農民が着ることを許された衣服の素材は木綿・麻等、色彩には紺・鼠・柿色の無地または縞と決まっており、紅染・絞染は禁止されていたという<sup>9)</sup>。衣服統制がなければ、農民が作り出す「刺し子」は現存するような趣ではなかったのかもしれない。

東北地方で農民に着られていた「刺し子」も南関東より西側では漁民達が着ることが多かったようである<sup>10)</sup>。温暖な気候の中で農作業をする農民に「刺し子」のような保温性の高い野良着は必要でなかった。しかし、海で働く漁民にとって冷たい海水から身を守るために必要だった衣服が、やはり何枚もの布を重ねた「刺し子」であった（図10～14）。

九州地方で用いられていた「刺し子」を例にして見ていきたい。図11は漁民が着ていた「刺し子」の典型例であるが、このようなもじり袖の形状の衣服を九州地方では「ドンザ」と呼んでいた。そのため、「刺し

子」がされていない農民の衣服も形状が同じであれば「ドンザ」と呼ばれた。先に述べたように温暖な九州地方の農民に保温性を求める「刺し子」は必要なかった。さらに、東北地方と異なり、綿・藍等の栽培を行うことができる地域であったため、木綿布は簡単に手に入るので、わざわざ小さな布を継ぎ合わせ着続ける習慣があまりなかったことが上げられる。

漁民にとっての「刺し子」のドンザは、①防寒②浮き袋③晴れ着としての要素が主であった。木綿布は3枚以上重ねると、降りかかる海水が皮膚まで通ることは少なくなり、体温を温存することができた。「刺し子」をすることで布と布の間に空気の層ができるため、誤って海に落ちた時も浮き袋の代わりになったという<sup>11)</sup>。「刺し子」のドンザは漁民にとってなくてはならないものであったことがわかる。そんな作業着としての「刺し子」のドンザの裏側には糸目が見えないように裏布が当てられている場合が多く、生活の豊かさが感じられる（図10）。さらに、漁民達は、作業着としての「刺し子」のドンザの他に、晴れ着としての「刺し子」のドンザを持っており、ウエストに紐で縛る仕事着と違い、半被（はっぴ）のように羽織ることを意識したデザインのものも持っていた。図12～14は、まさに外出するための晴れ着の「刺し子」のドンザである。このような絵画性の高い「刺し子」はむしろ稀な存在で、本来は幾何学模様の「刺し子」が施されたドンザ（図11）が一般的であり、晴れ着が古くなると作業着として用いられた。

図12と14のドンザは、海での作業を想定していないため、1枚の布に「刺し子」をしている。図12は大漁を祈願し、鯛を釣る恵比寿様が刺されている。

「刺し子」は背中心線を縫った後に刺している。図14の「刺し子」は、両肩の「刺し子」は背中心線を縫い合わせる前に左右別々に「刺し子」をしているが、ウ



図10 ドンザ（部分） 福岡市博物館所蔵



図11 幾何学模様のドンザ 福岡市博物館所蔵



図12 絵画文様のドンザ 福岡市博物館所蔵



図13 絵画文様のドンザ 福岡市博物館所蔵



図14 図13のドンザの背面 福岡市博物館所蔵

サギと波の部分の「刺し子」は背中心線を縫い合わせた後にしており、のびのびとした「刺し子」の線によって描かれている。このウサギと波のデザインのモチーフは、福岡に伝わる昔話「海を走るウサギ<sup>12)</sup>」であるという。この絵画性の高い「刺し子」が生まれた背景には、農民より漁民の方が派手好きであったことが考えられると福岡市博物館の松村利規氏は語られる。

そして「刺し子」は時代の流れの中で着用されなく

なる。その理由として、東北地方では交通の便が改良され、暖かい既製服を簡単に購入することができるようになり、わざわざ手間のかかる「刺し子」をする必要がなくなったのである<sup>13)</sup>。また、漁村の漁師達には海水に当たっても濡れることのないゴム製のカッパが開発されることで昭和30年代を最後に「刺し子」はほとんど着用されなくなった。

昭和初期に起こった民芸運動の中でも「刺し子」の



美しさは再認識された<sup>14)</sup>。民芸運動に共感した人が「刺し子」の作品を発表したことが<sup>15-16)</sup>、現在の「刺し子」ブームへとつながる理由のひとつといわれている。

「刺し子」の文化は、農民や漁民だけではなく一部の商人の間でも行われていた。それは東北地方で農家から紅花商人に昇格した商人達である。紅花豪商とは異なり、看板風呂敷、荷背負い用等の風呂敷を上方へ染めに出すには多額の金銭が必要であったため、紅花商人の妻達は、家紋や福寿文や吉祥文等を刺し、家内安全・商売繁盛を願った花風呂敷を考案した。しかも、型染風呂敷に負けないように工夫を惜しまず、型染風呂敷にない華やかさを表現することにも成功した。さらに、上方との交流があることを表現しようと上方の布（型染布等）を風呂敷に縫い付け（アップリケ）、その周りに「刺し子」をすることもあった（図15）<sup>17)</sup>。「刺し子」という技法のみに止まらず、アップリケを作り出すデザインセンスの良さがうかがえる。

このように、「刺し子」には一枚の布に刺繍を施すことを目的としたものもある。一針一針「刺し子」をしながら家内安全を祈ったものには、妊婦の厄除け前だれ<sup>18)</sup>や産着<sup>19)</sup>等もあった。

また、「刺し子」の文化は武士階級にも受容された。それは、花雑布（図16）と呼ばれるもので、上杉藩士族の中で、特に原方衆と呼ばれた半農半士の屯田兵の妻達によって作られていた。花雑布は表玄関に置かれたもの（玄関マットのようなもの）で、訪問者に対してはその家の顔となり、また農作業をして帰ってくる夫には士族意識を喚起させるものでもあったという<sup>20)</sup>。農民・漁民とは異なり、豊作や夫の無事を祈る「刺し子」ではなく、武士の妻としての誇りや強さを背景とした「刺し子」と言える。

「刺し子」とは、身分や地域を超え、「刺し子」を刺す女性の家族への愛情や他人への見栄等が作りだした文化であったと考えられる。農民・漁民の妻は、豊作・安全祈願はもちろんのこと、少しでも他人より格好の良い「刺し子」を夫や息子に着せたいと思い、細かい針目の幾何学模様や絵画文様の「刺し子」をした。武士の妻は武士の誇りを花雑布の「刺し子」で表現し、紅花商人の妻は、商人として夫がいかに上方との商売上の交流があるかを表現するため、花風呂敷にバランス良く上方の布を縫い付けたりと「刺し子」の工夫を怠らなかった。もちろん、着せたい夫や息子への底知れぬ愛情がなせる業であったことは言うまでもない。

ここまでで紹介した「刺し子」とは少し趣の異なる「刺し子」が江戸の火消達に着られていた（図17）。布を何枚も重ね「刺し子」をするため、衣服には十分



図15 花風呂敷（徳永1987より）



図16 花雑巾（徳永1987より）



図17 江戸時代の刺子半纏 消防博物館所蔵



図18 明治時代の刺子防火外套 消防博物館所蔵



図21 昭和30年代の刺子防火衣 消防博物館所蔵

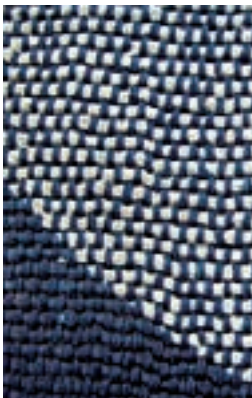


図19 図18表側



図20 図18裏側

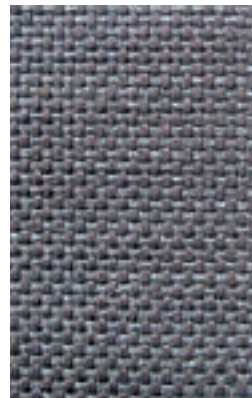


図22 図21表側



図23 図21裏側

な水分を含むことができ、火消の命を守った。「刺し子」は本来、寒さから身を守るものであるが、火（熱さ）から身を守るものとしての火消の「刺し子」は「刺し子」の中では異質な類例といえる。

火消刺し子袴纏は妻や母の愛情の賜物であった従来の「刺し子」と異なり、「刺し子」職人達によって作られた<sup>21・22</sup>。この「刺し子」は今まで見てきた「刺し子」とは細かな技法も異なり、刺し糸が縦方向に均一に刺されている。「刺し子」ではなく織物と見間違えてしまうほどである（図19）。均一に「刺し子」をすることで、裏側の染色柄の印象を損なうこともない（図17）。この手法で刺された「刺し子」は、明治期になってからも刺し子袴纏や刺し子頭巾として着続けられた（図18）。

その後、明治20年代に絨（厚手の毛織物）で作られた防火衣が作られた。しかし、昭和期になると改めて「刺し子」の機能が認識され、機械織の「刺し子」が防火衣に再び採用されている（図21）<sup>23</sup>。織った布にさらに縦方向に刺し糸を通してあるため、生地自体の構造は同じであるが、その見た目もその機能も手刺しの「刺し子」とは異なる。実際に手で触った感触も手刺しの「刺し子」は布そのものに弾力があり柔軟性もあったが、機械織の「刺し子」は布そのものが硬く柔軟性もないため着心地は悪かったのではないかと想像される。なぜ、機械織の「刺し子」が採用されたのか、はっきりした理由は分らないが、やはり一針一針刺すという大変な手作業の「刺し子」をする人材がいなくなったことが理由ではないだろうか。

#### 4. 現代刺し子ができるまで

「刺し子」には「現代刺し子」と呼ばれるものがある。「現代刺し子」とは、カラフルで簡単なイメージの作品が多い。古典的な「刺し子」がどのような経緯

で「現代刺し子」へと変化していったのか調査を行った。調査にあたり、国立国会図書館・杉野服飾大学付属図書館所蔵、筆者所有の「刺し子」に関する書籍53冊<sup>24)</sup>から縫製方法が記された書籍40冊を出版順にまとめ、表を作成した(表1)。

表1 「刺し子」に関する書籍一覧

	タイトル	執筆者	出版社	出版日
1	刺し子	吉田英子	文化出版局	1977. 4
2	刺し子	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	1979. 4
3	美しい刺し子	宮崎恵美子	株式会社日本ヴォーグ社	1979. 8
4	刺し子	株式会社婦人生活社	株式会社 婦人生活社	1979. 10
5	刺し子	黒ゆきこ	株式会社 主婦の友	1980. 1
6	暮らしに生きる刺し子	千葉意志・菊池泰司	株式会社 マコー社	1980. 6
7	刺し子づくし	斉藤禮	文化出版局	1981. 9
8	刺し子百葉	吉田英子	文化出版局	1981. 2
9	新しい刺し子のすすめ	宮崎恵美子	株式会社 マコー社	1982. 10
10	かんたん刺し子の小物集	吉田英子	文化出版局	1986. 2
11	刺し子の袋	斉藤禮	文化出版局	1987. 3
12	刺し子	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	1987. 5
13	刺し子のドレスと小物	銀座亜紀枝	株式会社 マコー社	1987. 9
14	刺し子の本	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	1988. 4
15	モダン刺し子集	吉田英子	日本放送出版協会	1989. 9
16	暮らしに生きる刺し子	千葉意志・菊池泰司	株式会社 マコー社	1989. 10
17	やさしい刺し子	斉藤禮	日本放送出版協会	1991. 7
18	刺し子の技法	銀座亜紀枝	美術出版社	1992. 1
19	刺し子	吉田英子	株式会社 雄鶏社	1993. 12
20	楽しい刺し子	吉浦和子	株式会社日本ヴォーグ社	1997. 5
21	花ふきん78	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	1997. 7
22	新刺し子	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	1998. 1
23	やさしい刺し子	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	1998. 4
24	刺し子の袋もの	吉田英子	株式会社 雄鶏社	1998. 11
25	刺し子を楽しむ	株式会社 ブティック社	株式会社 ブティック社	1999. 7
26	シンプル仕立ての新しい刺し子	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	2001. 12
27	おしゃれな刺し子	金沢京子	株式会社日本ヴォーグ社	2002. 2
28	刺し子のこもの	株式会社 ブティック社	株式会社 ブティック社	2002. 7
29	刺し子	竹田藍	株式会社日本ヴォーグ社	2003. 11
30	刺し子	株式会社 ブティック社	株式会社 ブティック社	2004. 7
31	カンタン、カワイイ刺し子の雑貨	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	2004. 7
32	暮らしに生きる刺し子	鈴木満子・林ことみ	文化出版局	2005. 12
33	小さな刺し子	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	2006. 6
34	刺し子の伝統模様	株式会社 ブティック社	株式会社 ブティック社	2006. 6
35	刺し子の本	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	2007. 6
36	刺し子でかわいい手づくり小物	サルビア	PHP 研究所	2007. 11
37	かわいい花さしこ	辰巳出版株式会社	辰巳出版株式会社	2008. 1
38	刺し子の花ふきん	株式会社 雄鶏社	株式会社 雄鶏社	2008. 4
39	刺し子で遊ぶ	銀座亜紀枝	株式会社 マコー社	2008. 4
40	かんたん手ぬい仕事刺し子	株式会社日本ヴォーグ社	株式会社日本ヴォーグ社	2008. 6



表1に示した通り、管見の範囲では「刺し子」の縫製方法について初めての書籍が出版されたのは1977年であった。意外に遅く驚かされるが、「刺し子」に関する書籍の出版が途中途切れることはあっても出版され続けられていたことにも驚かされる。

1977年に出版された『刺し子』の著者である吉田英子(よしだえいこ)氏は、1922年(大正11年)、秋田県本荘市生まれ。生家が呉服屋で買いに来る人々が着ている「刺し子」の美しさを幼い頃から見て育った人物である。この書籍には「刺し子」の歴史や東北地方の古い前かけや仕事着・道中着等「刺し子」の実物作品が多く紹介されている。

表1にかかげた書籍で、「刺し子」に関する歴史的背景や「刺し子」の定義等について詳しく述べられているものは4冊に留まり、簡単に説明をしているものは19冊、全く述べられていないものは17冊であった。

「刺し子」が行われた地域については東北地方のものとする説明が10冊、地域について述べられていないものが11冊という結果であり、「刺し子」の縫製方法に関する書籍のためか歴史的背景や「刺し子」がどういふものかについてあまり記述されていないことが分かった。

作品については、出版初期から1枚の布に「刺し子」がされ、2枚の布を縫い合わせるの、ふきん等をつくる時くらいで、鍋つかみ等を製作する時にはキルト綿を使用しており、刺繍的要素が強くなったことが理解できる。「刺し子」の柄については出版の年代を問わず古典柄(柿の花刺し等の幾何学模様)の紹介がなされている。オリジナル柄については出版初期の段階から発表されているが和柄が多く、布と糸の色も紺地に白糸の組み合わせが多かった。しかし、スカートやテーブルクロス等に「刺し子」をするなど、洋風な生活の中に浸透させるべく積極的に作品制作が行われていた印象を受けた。洋柄が本格的に提案されるのは1990年代後半からで、布と糸の色もナチュラルなものになり、子供向けのバッグのデザインの時の布と糸の色はカラフルになった。近年の傾向としては、「刺し子」の柄というよりは、「刺し子」の基本である直線の運針を利用したデザインが多くなり、ひとつの作品に多くの色糸を使用することでオリジナル性を高めている。2008年に出版された書籍の内容にはさらに変化があり、古典柄・手縫いを重視したふきんや小物が多く紹介されるようになった(図24)。

洋柄が提案され始めた1990年代後半に注目して表1の執筆者欄を見ると個人名ではなく出版社名で書籍を出版する形になっている傾向が読み取れる。1977年から1990年代後半に出版された書籍には執筆者自身の

「刺し子」に対する熱い思いを作品から感じる取ることができる。しかし、1990年代後半からは出版社が書籍を出版する形になった結果、作家や研究者の個性より、消費者の好みを重視した作品が紹介されるようになったと考えられる。

針をあまり普段から用いなくなった消費者を意識したためか、2000年以降、糸と針については「刺し子専用」の文字が多くなった。布については「刺し子用」の布を取り扱う場合は数例で、自由な選択を促している。これは、本来「刺し子」の布として用いられた藍木綿が手に入りにくくなったことに始まったようだが<sup>25)</sup>、近年ではむしろ表現のひとつとしてカラーバリエーションの豊富な布を紹介する傾向がある。

「刺し子」の刺し方・糸の接ぎ方等の記述については1977年に出版された『刺し子』からほとんど手法が変わっていない。「刺し子」の刺し方における基本形態は吉田英子氏によって早期に確立されたことが分かった。針目については、針目をそろえることや、表に見える針目が3、裏の針目は2で刺すように書かれている。野良着等の「刺し子」にはそのような決まりごとはないように思えるが、当時の風呂敷や袋等に強度を与えるための「刺し子」には裏の針目より表の針目の方が長く、絵柄をよりはっきりと見せる工夫がされており、「刺し子」は昔から機能だけでなく刺繍的な要素があったことが確認できる<sup>26)</sup>。今日における「現代刺し子」は、刺繍効果そのものが「刺し子」を表現する対象として引き継がれていると言える。

また、近年出版された書籍のサブタイトルとして「sashiko」とローマ字表記されたものが3冊あった。海外を意識したものであろうか。表1には示さなかったが、海外での「刺し子」に関する書籍について調べるとフランスやアメリカ等ですでに出版されていた。紹介されている作品は紺地に白糸で日本調の柄を刺したものが多いが<sup>27-28)</sup>、2008年にアメリカで出版されたものには色とりどりの「刺し子」が紹介され<sup>29)</sup>、近年の日本での「刺し子」の傾向が反映されたものとも考えられる。「刺し子」は「sashiko」となって世界に発信されている。



図24 フランスで出版された「Sashiko」の書籍(Calvet 2006より)

## 5. 「刺し子」の洋服の提案

近年の「刺し子」に関する書籍には、「刺し子」を用いた洋服のデザインがあまり提案されていない。そこで、3点の「刺し子」の洋服を提案したい。

### 5-1. 子供服

子供は大人の約2倍の汗をかくため、身頃部分の裏側にタオル地を当てた(図25・26)。表地とタオル地を合わせるために、「刺し子」を行った。夏は花火やお祭り等があり、夜間に外出することを想定し、「刺し子」の糸には「蓄光ホタル糸」を使用した。「蓄光ホタル糸」は、太陽や蛍光灯の光を当てると発光し、肌に触れても問題のない糸である<sup>30)</sup>。夜になると衣服が光り出すことは子供にとっては驚きであり、楽しみでもある。また、用い方によっては夜間における交通事故防止等にも役立つものとする。刺し子の模様は、表地の金魚の形にそって「刺し子」を行った(図27)。

今回の制作した子供服(図25)は、「刺し子」がテーマであったが、身頃の裏側にタオル地を当てたことにより首周りのゴム通し部分を作るために縫製方法を工夫した結果、アームホールの縫い代が直接肌に触れないようになり、大人に比べ肌のデリケートな子供には良い結果だった。



図26 裏身頃と裏袖



図25 子供服

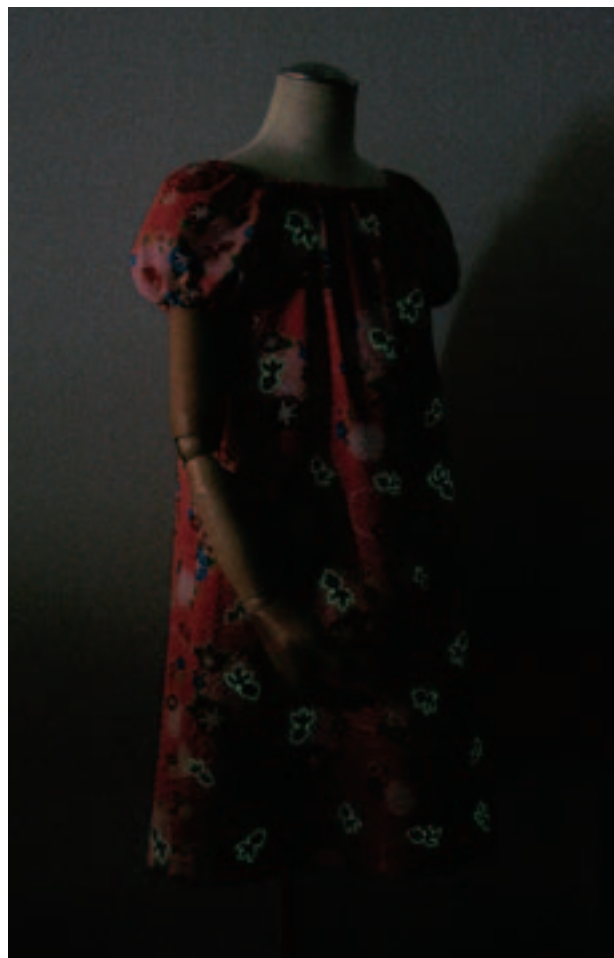


図27 子供服(夜間時)

## 5-2. ワンピースドレス

使用した布は、ポリエステル50%、レーヨン30%、麻20%のものであり、布そのものに光沢があったので「刺し子」に使用した糸にも光沢のある刺繍糸を使用し、糸の色は4種類の糸を使用した(図28)。糸のグラデーションを引き立たせるために、刺し方は「刺し子」の基本である「目落し刺し」とした(図29)。この作品の「刺し子」には、染色した印象を与えるような表現をすることを目指した。染料が徐々になくなる雰囲気を出すために、色を徐々に布地の色に変化をさせるだけでなく、刺繍糸の本数を上から6本、4本、2本と減らし、布地が刺繍糸の合間から見える分量を徐々に多くし、自然に刺し子の部分がなくなるようにした(図29)。



図28 使用した刺繍糸(4種類)



図29 ワンピースドレス(部分)

ワンピースドレスのデザインは、「刺し子」が作り出す横線を壊さないようにネックラインをボートネックラインにし、ノースリーブにすることで、上半身の部分の「刺し子」が強調されるように配慮した。「刺し子」を施したベルトを制作し(刺繍糸①と②、3本どりで「刺し子」を行った。)、組み合わせることで全体のバランスにしまりがでた(図30)。



図30 ワンピースドレス



### 5-3. カクテルドレス

「刺し子」に使用する布は、織物に限定されることはないと考え、牛革（黒スウェード）を使用した。「刺し子」の柄は、身頃に使用した布をイメージにデザインした。身頃に使用した布は2枚のオーガンジーの間に金糸が波を描くように入っているため、金糸の見え方は一通りではなく複雑である。「刺し子」に金糸の光り方を再現するため、刺した糸は黒ミシン糸を2本取りにしビーズを通した。ビーズには大きさの異なるビーズを使用し、色も単純に金一色とはせず、見る角度によって紫や緑等が見えるビーズも使用した（図31）。ビーズは、1つずつ縫いつけるのではなく、「刺し子」の1針の糸に3～4個のビーズを通し（図32）、縫い付けることにし、「刺し子」の応用とした。



図31 カクテルドレス（部分）

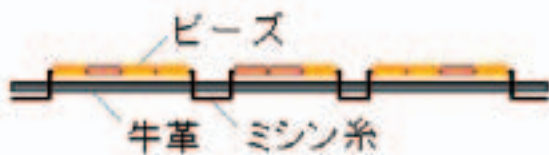


図32 ビーズの通し方図

ベルト部分の「刺し子」を強調させるために、身頃の布の部分を最小限にしたデザインのカクテルドレスを制作した（図33）。デザインが帯を彷彿させる太いベルトのため、スカート丈が長いと「和」の要素が強くなると考え、スカート丈を短くした。このように「和」の要素を減らすことで、「刺し子」を用いた「洋」への表現の可能性をより高める効果になると思う。



図33 カクテルドレス

## 6. まとめ

『民俗服飾文化刺し子の研究』を執筆した徳永幾久（とくながきく）氏は、多くの「刺し子」に関する資料を自ら収集し、その調査・研究を行い、「刺し子」について詳細にまとめた。これほど「刺し子」についていろいろな角度（世界の「刺し子」についても調査・研究を行っている。）からまとめあげた研究は他にない。徳永氏は現代の「刺し子」については否定的で、「本来の刺し子とは程遠い、従来、技術を模倣しただけの刺し子という名の縫い遊びだ」と嘆いている<sup>31)</sup>。

確かに、現代の「刺し子」には防寒・補強といった本来の実用的な目的は求められていない。むしろ、「刺し子」によって作りだされる刺繡的効果を主にしているように思える。しかし、昔の女性達が心をこめて「刺し子」を一針一針進めたように、現代人も同じように心をこめて一針一針進めていることに違いはない。近年、若い女性の間には小さな物を作ってプレゼントをすることがブームであるという。普段は針等を持たない若い女性であってもやってみようと思えるくらい「刺し子」は簡単であった。そのため、若年層にも「刺し子」は受け入れられた。

士族には「刺し子」を学ぶ学校があったようだが<sup>32)</sup>、多くの農民や漁民が同様に学校で「刺し子」を学んでいたとは考えにくい。農民や漁民は、日々の生活の中から美しい「刺し子」を見ては、あれこれ悩みながらより美しい「刺し子」を求めて、自ら「刺し子」を学び、その技を究めていったのではないだろうか。でなければ、「刺し子」が、地域や身分を越えて広く愛用されることはなかっただろう。現に、「刺し子」を見て美しいと感じた現代人が作品を作り上げ、書籍を出版していることがこれを証明しているように思う<sup>33)</sup>。

本来の「刺し子」とは、多くの場合、有り合わせの布と糸によるものである。もちろん針も「刺し子専用」というものはなかった。近年出版されている書籍には「刺し子専用」の糸・針を使用するといった傾向が見られる。その理由のひとつには、現代人（特に若年層の女性）にとって「刺し子」は身近なものではないために応用がきかず、そもそも裁縫道具を持ち合わせていない人すら多い。その導入のために選んだ「刺し子」キットのデザインがディズニーキャラクターであったとしても、それは間違いなく「刺し子」である。漁民の妻が昔話のウサギを「刺し子」で表現したことや、紅花商人の妻達は「刺し子」にアップリケを付けてしまったことと同じ発想であると考えられる。「刺し子」の

デザインとは、決められたものではない。作り手の自由な発想が「刺し子」の存続を支えてきた。

寒さから身を守ってくれた「刺し子」は家族の絆の象徴であった。「現代刺し子」の基盤を築いた吉田英子氏は、子供が描いた絵を母親が「刺し子」をするという新しい「刺し子」の提案もしている（図34）<sup>34)</sup>。親子の絆が希薄になったと指摘される現代において「刺し子」は家族の絆を呼び戻す力となり得るのではないだろうか。今回制作した子供服についても、衣服を通して家族間の会話がさらに楽しいものになればと願いながら一針一針「刺し子」を行った。「刺し子」の機能やデザインは変化してもその背景にある家族の絆、愛情は変わらないのである。



図34 母子合作の「刺し子」(吉田1989より)

## 7. 謝 辞

本稿を作成するにあたり、多くのご教示をいただくとともに館蔵資料の撮影、本稿への使用をお許し下さった原始布・古代織参考館（山形県米沢市）山村幸夫氏、福岡市博物館（福岡県福岡市）松村利規氏、消防博物館（東京都新宿区）大久保宣勝氏・吉廻緑氏、同じく多くのご教示をいただくとともに店内の撮影、本稿への使用をお許し下さった株式会社オカダヤ（東京都新宿区）松本衣世氏に御礼申し上げます。

## 8. 註

- (1) 株式会社山村商店 原始布織工房 出羽の織座 原始布・古代織参考館『特別企画展 原始布—今、見つめ直される北からの衣文化—』株式会社山村商店 原始布織工房 出羽の織座原始

- 布・古代織参考館 (2002) p. 19.
- (2) 福井貞子『ものと人間の文化史 93 木綿口伝』財団法人法政大学出版局 (2000) p. 9.
- (3) 註 (1) と同じ pp. 30-31.
- (4) 安田富士子、永津起代枝「藍染木綿布の刺し子による力学的及び賦形的特性の変化」(「岐阜女子大学 紀要」第12号 1983) pp. 89-93.
- (5) 徳永幾久『民俗服飾文化 刺し子の研究』衣生活研究会 (1987) pp. 66-68.
- (6) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典第九巻』株式会社小学館 (1974) p. 30.
- (7) 株式会社吉川弘文館『古事類苑 服飾部』株式会社吉川弘文館 (1979)
- (8) 註 (5) と同じ p. 80.
- (9) 註 (5) と同じ pp. 58-60.
- (10) 株式会社 INAX『津軽こぎんと刺し子 はたらき着は美しい』INAX 出版 (2006) pp. 46-59.
- (11) 福岡市博物館、松村利規『福岡市博物館開館15周年記念特別展 ドンザ -知られざる海の刺し子-展』福岡市博物館 (2005) p. 10.
- (12) 福岡県民話研究会『読みがたり 福岡のむかし話』株式会社日本標準 (2005) pp. 28-33.
- (13) 原礼子・福野明子編『刺しとこぎん』国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 (1995) p. 1.
- (14) 註 (13) と同じ p. 1.
- (15) 銀座垂紀枝『刺し子の技法』美術出版社 (1992) pp. 6-8.
- (16) 文化出版局『季刊「銀花」春の号』文化出版局 (2007) pp. 6-11.
- (17) 註 (5) と同じ pp. 170-186.
- (18) 註 (5) と同じ p. 310.
- (19) 註 (5) と同じ pp. 313-326.
- (20) 註 (5) と同じ pp. 91-143.
- (21) 砂川哲『桑田コレクション 火消刺子絆纏』株式会社京都書院 (1998) p. 109.
- (22) シンシア・シェーバー、宮本規子、吉岡幸雄『驚見コレクション 半纏 法被』紫紅社 (1998) p. 42.
- (23) 東京消防庁装備部『災害と戦ってきた装備の返還 消防装備史』東京消防庁装備部 (1998) p. 128.
- (24) 2008年8月に検索
- (25) 株式会社婦人生活社『伝統と新感覚の刺し子手芸 刺し子』株式会社婦人生活社 (1979) p. 30.
- (26) 註 (13) と同じ pp. 40-43.
- (27) Agnes Delage - Calvet 2006. Sashiko Marabout d' ficelle

- (28) Joie Staff 2007. SASHIKO STYLE Japan Pubn Trading Co.
- (29) Susan Briscoe 2008. Japanese Sashiko Inspirations David & Charles
- (30) ジャック株式会社ホームページ  
<http://www.jackand.co.jp/html/itosyosai.html>
- (31) 註 (5) と同じ pp. 439-440.
- (32) 註 (5) と同じ pp. 74-75.
- (33) 金沢京子『おしゃれな刺し子』日本ヴォーグ社 (2002) p. 2.
- (34) 吉田英子『NHK 婦人百科 モダン刺し子集』日本放送出版協会 (1989) p. 56.

## 9. 参考文献 (註以外のもの)

- (1) 福岡市博物館『福岡市博物館名品図録』財団法人福岡市文化芸術振興財団 (2000)
- (2) 福井貞子『ものと人間の文化史 95 野良着』財団法人法政大学出版局 (2000)
- (3) 朝岡康二『ものと人間の文化史 114 古着』財団法人法政大学出版局 (2003)
- (4) 栗山武子『栗山武子のビーズ刺繍でドレスアップ』文化出版局 (2003)
- (5) 株式会社パッチワーク通信社『はぎれがあったら…ちょこっとつくる』株式会社パッチワーク通信社 (2008)
- (6) 表1で紹介した文献については省略した。

## 10. 写真出典

- 図1 株式会社オカダヤ 新宿本店内・筆者撮影
- 図2～9 原始布・古代織参考館所蔵品・筆者撮影
- 図10 福岡市博物館所蔵品・筆者撮影
- 図11～14 福岡市博物館所蔵品・同博物館提供
- 図15・16 徳永幾久『民俗服飾文化 刺し子の研究』衣生活研究会 (1987) p. 13. ・p. 35. より転載
- 図17・18・21 消防博物館所蔵品・同博物館提供
- 図19・20・22・23 消防博物館所蔵品・筆者撮影
- 図24 Agnes Delage-Calvet 2006. Sashiko Marabout d' ficelle 表紙より転載
- 図25～27 筆者制作・撮影
- 図28 筆者撮影
- 図29～31 筆者制作・撮影
- 図32 筆者作図
- 図33 筆者制作・撮影
- 図34 吉田英子『モダン刺し子集』日本放送協会 (1989) p. 56. より転載